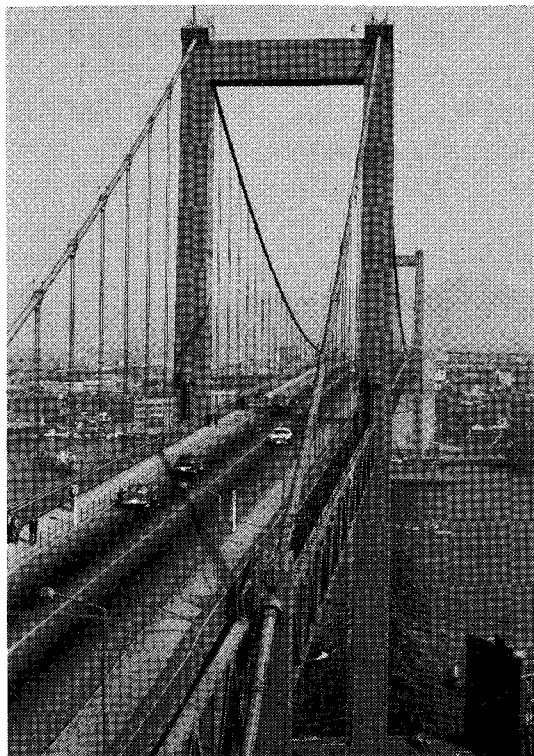
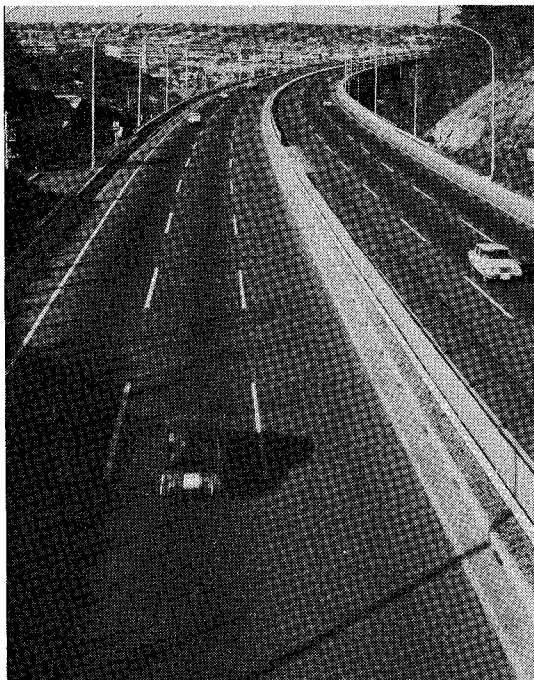


新年号特集

世界の中のわが土木界

会誌編集委員会



▲カット写真▽第三京浜道路(上)・土木年鑑1967より転載)と若戸大橋(下)

日本が明治新政府によって近代国家たらんとしてスタートしてから今年はずっと100年目になる。第二次世界大戦終結後からは満20年以上経過した。この一世紀の間のわが国の驚異的ともいえる飛躍、敗戦後の見事な立ち直りは世界史の奇蹟とさえいわれている。その原動力のひとつとして、わが工業技術陣の果たした役割を、われわれは深く味わうべきであろうと思う。特に土木技術陣は、縁の下の支えとして、日本の現代の発展に偉大な貢献をしたことを自負してよいであろう。

とはいえ、これまでの惰性で、わが土木界がこれからの無条件に伸びてゆくとは必ずしもいえないのではないかと。というのは、一般に技術は特に社会の発展と密接な関係があり、技術進展の条件として、技術界には鋭い時代感覚の把握が必要とされるからである。

これからのわが土木界を占なうに当たっての時代感覚として、われわれはわが土木界を世界的視野の中で眺めようとする国際的感覚の重要性を強調したいと考える。

いうまでもなく、地球は時間的に急速に狭くなりつつある。それにとまって、大量の土木技術者が海外へ赴くようになったし、外国からの土木関係者の来日も激増している。国際会議、海外視察団の往来、海外工事、さらには学生団体の相互訪問などが、ほんの10年前には予想もつかなかったほどの勢で激しく行なわれるようになってきた。国際交流のこの急激な拡大のゆえに、とかくわれわれはこれを機械的に処理することのみ汲々として、この大きな流れにどっしりと対応する十分な姿勢を整えないことを恐れる。

しかし、国際化の波は確実にわが土木界を世界の荒波の中に押し出している事実を、われわれは深く認識すべきであろう。その実情を冷静にとらえ、わが土木界のつぎの発展への条件を、新しい年を迎えるに当たって会員諸士とともに考えてみたいと思う。

特集はまず、学界、官界、業界それぞれの方々からの論説に始まる。ついで会員に対し客観的資料を提供する意味で、わが建設業、建設コンサルタントの状況が海外との対比で解説され、最近のわが海外工事の様相が提示されている。続いてわが土木技術の現在の実力のほどが、四つの分野を例として紹介され、さらに座談会でもそれが追求されている。最後に外国から日本の土木界を眺める機会の多かった人々の随筆風の所論がきわめて興味ぶかい。